

甲状腺外科草子 157 哲人宰相：大平正芳余話⑱

杉野 圭三

玄関への車の乗りつけ

「祖父 大平正芳」の巻頭で橋本五郎（読売新聞特別編集委員）は述べる。

「政治とは最高の道徳である」とは福田赳夫の名言である。道徳家に政治をやられてはかなわないとは思いますが、リーダーは道徳を重んじてもらわなければ困る。道徳とは平たく言えば「礼節」ということである。大平は「礼節」の人であった。それは神崎製紙の創立者、加藤藤太郎への接し方にもよく現れていた。旧制三豊中学（現・観音寺一高）、旧制東京商大（現一橋大学）を通じて大平の先輩だった加藤は、香川県内の恵まれない子供たちを大学に行かせようと自ら奨学金制度を作った。その加藤を、大平は深く尊敬した。大平が加藤を神崎製紙に訪ねる時、玄関に車を乗りつけたことは一度もなかった。いつも玄関から離れた場所で車を降り、歩いて玄関に入った。自分が心から尊敬する人のところに車で乗り付けるなどという礼節の無いことを自らに許さなかった。

加藤藤太郎（神崎製紙相談役）は大平を次のように語っている。

この間の大平さんの温厚・誠実なお人柄は、終始一貫して変わりませんでした。大蔵省時代から総理大臣にご就任になられた後も、どんなご多忙な時でも、正月には必ず拙宅にご挨拶に来てくださいました。中略、若い頃の大平さんの人格形成に最も大きな影響を与えたのは、中井虎男先生ではないかと思えます。中井先生は私と大平さんの三豊中学時代の数学の先生で、その円満具足したご人格は卒業生全員の敬慕の的でした。中略、大平さんは後年、その自著「素顔の代議士」の中に、中井先生を偲んで以下のように書いておられます、『われわれはその人の倂をしのぶだけで、心温り、生くる悦を覚えるような人との道縁に侍ることができれば、それは何者にも代え難い人生の恩寵である。又その人となりや懐うことによって常住坐臥道心に還ることができるような人の倂を心に持つことができれば、それ程の人生に対する奨励はないと言えよう。中井虎男先生は、私にとっては、正に、そういうかけ替えのない人であり、導師である』中略、

大平さんがまだ大蔵省の課長の頃、郷里の香川県の知事にと出馬を懇請されたことがあり、私にも意見を求められましたが、私は知事にならいつでもなれるからと反対しました。それから、一、二年後であったと思いますが、こんどは代議士になりたいとお話があったので、それはいい、大い

にやりなさい、と賛成しました。いま考えると、知事に反対し、代議士に賛成したことは間違っていないかったと、内心つくづく喜んでおります。

（大平正芳回想録 追想編より一部抜粋）



加藤藤太郎



新築の自宅

家の火事

1974年1月12日、大平の自宅が火事で焼失した。自宅は文京区千駄木周辺で、近くには「大平イチョウ」とも呼ばれる大イチョウがあったという。

事件の内容は「祖父 大平正芳」に詳しい。

香川県の参議院補欠選挙で応援演説中の大平は「たった今、東京の自宅が全焼したとのこと。幸いけが人はなかったようで安心しました。中国の諺では火事は祝融と言いましてめでたいことです」と淡々と演説を行った。

火事の原因は、精神的に不安定だった若いお手伝いの女性の放火だったが、未成年の嫁入り前だったことなどを憂慮し、幼い親戚の子供の火遊びと発表された。その子供には気の毒なことです。

確かにぬれぎぬを着せられた子供には気の毒だが、後年、大平夫人が亡くなった時、そのお手伝いさんがお悔やみに上京され元気な様子だったとのこと。

新築の家への不満

焼失した家の再建は志げ子夫人と名建築家「今里隆」が2年もの打ち合わせの末に着工した。

しかし、基礎工事現場を見た大平は「私はこんなに大きな家はいらないよ、金は清算するからすぐに中止せよ」、ふだんの温和な大平からは想像できない怒鳴り声が響いた。

今里はこの時のことを次のように語った。

私は如何したものか戸惑い座礁した心地でした。数時間後、毅然とした夫人と打ち合わせた結果、胸をなでおろすことができました。大臣の一喝に夫人は逆らうこともせず、『確かに大きすぎても後々ね、でも狭すぎるのも嫌よ』と、おっしゃり、大臣に内証で納戸を計算に入れず、八十八坪と末広がりの縁起の良い数で夫人と密約を交わし、大臣も気持ちよく納得して下さり、素晴らしいお宅が完成しました（「大平志げ子夫人を偲ぶ」より）

贅沢な生活を嫌い質素な生活を心がけた大平だが、奥様には弱かったようだ！

参考資料：大平正芳回想録 追想編、Wikipedia

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2025年10月30日